

高倉昔話し芝居

高倉郷土芸能保存会

平成二十四年二月四日

高倉公民館 初演

十六番 明治天皇 梵天山に立つ

木二ツ

解説

明治十六年四月十六日第百二十二代明治天皇睦仁陛下におかせられましたは、皇居を発輦され十七日朝には所沢を発ち民家少なき林の道を下藤沢の金比羅坂へ掛かって来られたが急な坂でぬかっていて馬も車も立ち往生、村人はすかさずこれを手伝い無事にご風輦は進み午前十時ご休息所の黒須の繁田邸へお入りあそばされた。

① 開幕

孝吉 「あんつつたつてよう、明治天皇がもう黒須の繁田へ入らしつ

たとよう、今まあだ三十四だつてなあ」

勇蔵 「あんつつたつてよう、十八で御位につかしたちゅうから

なあ若え天皇よう」

亀吉 「もうこんなに早く来たかい、あんでも黒須村え天皇が

来るつちゅうお達しが来たなあ三月へ入ってからだつてなあ」

鶴吉

「あんつつたつてよう、随分 黒須の戸長の小島久平さんや村役の者あてんてこ舞だったとよう、先ず霞川橋うちゃんとなおすすめえつちゆうでな、蓮華院ねえたのんでな、あのでつけえ杉う幾本も切らしてもらつてなあ、二つにひつ挽いてなあ、それえ並べてな、間にやあせたとよお」

孝吉

「路つぱたのもんも随分、ことだったようだあ天皇が通るに目ざありな所あみんな葦簀う張ったり、道普請したり路あ皆きれいにして、いら良くなつてんとよう。どこの学校子も皆んな道い並んで出迎えたとよう」

勇蔵

「御在所ちゆう、休息所の繁田なんずじゃあ、表門の両脇いな、新しく車やどりつちゆうを作つてな表門から奥の門まで菊の紋のついた真っ白え幕う二重に張つたりな其の奥の杉山と杉山の間でえ苦の屋根の小屋あおつ建つてな上官の寝っ場にしたとよう」

亀吉

「あにしる兵隊もこだけで八百人ちゆうからたまげたあ茶造場ちゆう 茶造場あみーんなこの兵隊の寝っばだとよう。この布団集めもことでなあ、でも笹井、広瀬、入間川のもんから貸し出しの申し込みがえらあつてな、四百組集まつたとよう。この運搬だけでもことなもんだつたんべよう」

鶴吉

「脇の田んぼはみんな馬のつなぎっ場にしてな、馬の餌馬桶がどうにもたんねえつちゆうでな、醤油作りの樽うな使あだとよう」

孝吉

「餌も全部じゃあえら喰うだんべよう、其のかあり出るのもえら出るらしいや」

全員

「へーえ、ことなもんだあ、馬の屁だ、ああ、たまげたもんだあ、馬の屁だ、ああ、でっけもんだあ、馬の屁だってかああ、馬の屁だ、馬の屁だ アハハハ……」

閉幕

解説

繁田邸では天皇の御休息あそばされる屋内は殊に善美を尽くし床の間には紫宸殿獅子舞の図の掛け軸を飾った。天皇はこれを御覧になり「これを今日の演習地の飯能まで持ち来たれ」とのお言葉があった。持ち主の繁田の親戚の發智莊平氏は感激し奉獻したき旨を言上したが天皇は「この家の宝物、写すだけで良い」と御せられ奉獻を取り上げなかったと云う。

後に皇居造営の折、發智莊平は掛け軸の願納を果たした。

發智家は現川越市笠幡にあった第三代豊岡町長繁田武平氏の兄、庄平の養子に行った当時の大家である。

②

開幕

勇蔵

「おーい めえった めえった えれえこった えれえこった 明治天皇様が高倉へ登って来らしやるとよう あんでも浅間山の女坂あ登ってなあ梵天山までくんだとよう」

亀吉

「じゃあこの長坂通りゆう通うらっしやるちゆうかよう」

鶴吉

「じゃあ下の黒須から牛沢まで又笹井を眺めんにじやまな木う切らにやなるめえよ」

孝吉

「この勇さんの大椿もしようがねえなあ切るべえや」

(ジーコー ジーコー ジーコー ドシーン)

孝吉 「じゃあ、みんな ジャマ物あ切り切り梵天山迄行くべえや」

全員 「行くべえ、行くべえ」

閉幕

(暗転 スポットをピカピカ 大小太鼓 ドーン ドンドン・・・)

解説

十九日暁、いよいよ東西両軍は枚を啣んで飯能より西軍は黒須の東軍に迫る、東軍は筒先を揃えて之を乱射した。歩兵の突喊あり、騎兵の奇襲あり、戦闘は時々刻々激烈を加え銃声耳を裂き煙は地を隠した。

やがて西軍は入間川の防禦線を突破し、黒須の市街戦となり東軍は民家に潜入して内より応戦した。

この時、高倉の高台より発砲した大砲の大音響は各家の煤を払い落した。

これを見ようと観客は十里 二十里の道を遠しともせず雲合霧集し僅かな縁故をたより宿泊を求めた。とうとう物置の軒下まで寢床化した。しかしそれは其の一部にすぎず大半はみな兵隊と露営して一夜を明かした。

解説

昨日、飯能の羅漢山、今の天覧山よりの演習をご覧になられた明治天皇の一行は十九日朝五時、御在所を發し笹井から馬上にて觀戦され、浅間山にご登臨なられ西して梵天山に愛馬金華山をお止めになり第六軍を御統監あらせられた。

③ 開幕

(天皇のみご統監のしぐさ二人は不動)

天皇 「おお、大演習の戦行見事なるや」

兵 「ははー 畏くも陛下におかれましてはさぞやご難儀にと思ひ奉ります」

天皇 「あいや、まあ、それほど奉らんでもよい。ここは眺望良き所よあのはるかに霞む山々は何と？」

兵 「はは、右手に見えまするは、筑波山、日光富士、赤城山、武甲山、さらには秩父連山に続きまする」

天皇 「まこと見事。これよりは如何なる予定に有るかや」

兵 「はは、然らばこれよりご在所の繁田家に戻り、ご昼食の後、帝都ご帰還のご予定にござり奉りまする」

天皇 「はは 又 奉るか アハハハ・・・」

閉幕

解説 午前十一時大演習が終わり天皇一行は繁田邸にてご昼餐召され

休息の後、帝都ご帰還なされたと豊岡町史は伝えて居ります。

尚この古事を語る老人も居なくなりましたが高倉の梵天山に残る明治天皇御野立所の大きな石碑が百三十年前を語っております。有難うございました。